

# 三上 章「現代語法序説」

大堀 淳

平成 30 年 11 月 30 日

# 三上の文法論の特徴

西洋の文法体系を前提とせず、日本語の文法概念を整理する試み。

- 文の構成構造ではなく、日本語の意味制約を基礎とする。
- 三上文法の特徴
  - 主語は存在せず、連用補語を併置する述語一本建て。
  - 文は基本単位ではなく、多くの文節はオープン
  - 名詞・代名詞は、代理、代表の機能を有する

この構造はアリストテレス、デカルト、クリプケらの系列で代表される、

- 屈折語族の主語・述語構造、さらに
- 述語論理学の表示的意味論

などに見られる、神の視点からの自然世界の存在とその記述のパラダイムでは不可能な、主体の意味生成を解明する述語的意味論を考える上での出発点となると考えられる。

以下は三上文法における「意味論的な特徴づけ」と思われる要素の抜粋。

# 文と文節単位

- 文節

助詞を含む単位。ハシモト単位。英文法の単語に相当。

- 文

(述語の完結で)終止する。その先頭は確定していない。  
文節は、文末を超えて係る場合が多い。

「駿河の富士は日本一だ。高いし、美しいし、どこから見ても日本一だ。」

「富士は」は、「高いし、美しいし、日本一だ。」にも係る。

# 代名詞と代表作用

## 代名詞

- 代名作用をもつものは、第3人称の人称詞。
- 第1, 2人称代名詞は、代名ではない。

## 代名詞の境遇性

- 名詞的代名詞（これ、ここ、こちら） 連帯詞的代名詞（この、こんな） 副詞的代名詞（こう、こんなに）これらは、境遇性をもつ。
- 形容詞には境遇性はない。（西洋の述語的な性質と思われる。）

## 主観的形容詞（欲しい、欲しがる、欲する）

これらは、話者の心理の表現に限定。他者の場合、「悲しいのだ」と取次の形をとる。

## 代表作用

日本語では、あらゆる名詞、あらゆる動詞が代表作用をもつ。

# 名詞文、動詞文、準詞文

動詞文：経過を表す。

- 動詞：「する」を代動詞とする用言。
  - 「飛ぶ。」「飛びはするが、」「書く」「書きははするが、」
- 動詞文：動詞で結ぶ文。堤題の「は」がなくても完全。

名詞文：(形容詞文、準詞文) 性質を表す。

- 名詞文：「ある」を代動詞とする用言で結ぶ文
  - 「害虫だ。」「害虫ではあるが、」
  - 「静かだ。」「静かではあるが、」
  - 「ある」自身は、動詞文。(ありはするが、)
- 「は」に助けられるのが原則。

準詞文：名詞＋準詞「だ」などで結ぶ文。

- 措定：包摂判断。PはQだ。P Q
- 指定：幹事は私だ。(代名詞は、指定文だけに使用される。)
- 端折り：明日から学校だ。私は、ワイン。

# 主格、主題、主語

**主格** 動詞に対する論理的初関係を表す第一格。

**主題** 言語心理学的一般用語

**主語** 第一格が構文上特別な働きをする言語における用語。

日本語では、主格 = 主語ではない（文法上は他の格とほぼ対等）。さらに、主格 = 主題でもない。

- 犬（甲）が走る。（主題とならない大人しい主格）
- 犬（乙）は犬（丙）である。（乙：主格かつ主題、丙：述語に包摂された主格）

（西洋語でも）主語と主題は独立。

*In the country, close by the roadside, stood a pleasant house. In front, lay a little garden. Near the hedge, in the soft green grass, grew a daisy.*

“stood a house” や “grew a daisy” は、倒置ではなく、紹介の自然な順序。

# 日本語の主格

日本語は、すべての格が文法上対等な動詞に対する補語である。

「甲が乙に丙を紹介す（る）」

- 甲が：主格補語
- 乙が：与格補語
- 丙を：対格補語

従って、屈折語と異なり、主格も不定法の内部に入る

甲が乙に丙を紹介す（る時、れば、するのは...）

# 格助詞と係助詞

「は」 堤題の係助詞

「が」 主格の格助詞

- 通常、主題は、何らかの格の補語を兼ねている。
- 「は」は、主格、対格の場合、格助詞を兼ねる。
- 主題（堤題の「は」）は、無格でもありうる。（私は、うなぎ。）



# 堤題の「は」

## 主題の種類

**顕題** 「ヘンリーはどうした？ ヘンリーは到着しました。」

**陰題** 「誰が到着したか？ ヘンリーが到着したんです。」

**無題** 「なにかニュースはないか。ヘンリーが到着しました。」

## 「何々は」

- 措定の主題は無格。
- 強い「の」的磁力線によって、場面をマグネタイズする
- 用言の補語に空席が有る場合、その補語を兼ねる。空席がない場合、静的な「の」的關係にとどまる。

## 名詞文のパターン

- 主題：全体は、...
- 解説：部分が云々

# 西洋語の主語

## 主格、主語、主題

- 主格：述語（動詞）の第一格。
- 主語：述語動詞と呼応する nominee。おもに主格であることが多い。
- 主題：意味論概念、一般用語

主格、主題は、世界共通の一般概念だが、主語は、コーブラ（繫辞、be 動詞）を持つ西洋語の一属性。

# 西洋語の特徴

西洋語に関する洞察（三上の洞察をさらに解釈）

- 典型的名詞文では、主格と主題は一致する。
- 西洋では、この性質が、
  - 「主格」＝「主語」＝「主題」と同定され、さらに、
  - 文（認識単位）は、主格に関する言明、さらに、

「文は主語（対象）に関する言明である」

との、世界記述の枠組みとしての一般化が起こる。

- この枠組みを反映し、言語の基本単位は、

「対象（主語）の属性（述語）」、

となり、主格が特権的な文法的地位を占める言語が構成された。

# 西洋語の認識論・意味論への影響

「主格」＝「主語」＝「主題」同定による一般化は、  
「世界は、神の視点から、存在するものを、その性質の束として  
記述すれば、記述しきれる。」

との西洋的な知的習慣に根拠つれられ固定される（アリストテレス、デカルト、ガリレオ、ニュートン etc）。

## この知的習慣の影響

- 記述者（「神」）は、構文上、記述に関与しない。
- 希望等の表現も、「対象（主語）の属性（述語）」の形式となるため、人称代名詞が多用される。
- 述語論理学及び西洋の意味論は、この構造を形式化した体系。